

思ひ出と希望

富山房



此度富山房が創業五十周年を迎へたことは、この期間が我が國運發展の目覺しい時代であり、然かも富山房が文化的進歩と重大なる關係を有する出版事業に従つてゐたことに於て、最も意義があり慶祝すべきことであると思ふ。

回顧すれば、私が坂本君と始めて相識つたのは、明治二十一年頃のことであつて、當時は故文學士立花銃三郎氏及び故文學博士芳賀矢一氏がまだ大學の學生の頃で、「國文學讀本」と云ふものを編纂して、その校閲を依頼されたが、これを富山房から出版するについて、その頃兩氏の學友であつた現貴族院議員中川小十郎氏が坂本君に交渉され、それ以來、坂本君と相識り、殆ど五十年來の親友と

なつたのである。今では立花芳賀兩氏は物故され、中川坂本及び老生の三人が現存してゐるやうな次第で、その頃のことを考へると、まるで夢のやうである。その著書も、今では私の書架にも見出すことが出来ぬのであるが、然しこの「國文學讀本」は、日本の國文學史の殆ど先驅をなしたものであり、三上高津兩氏の「國文學史」よりは、數ヶ月前に出たと記憶する。同時にこの書は、かう云ふ研究の上にも一新紀元を劃したものと、今でも云へると信ずるのである。

私が文部省より海外留學を命ぜられたのは明治二十三年七月で、その月に日本を立つて獨佛兩國に滞在し、歸朝したのは明治二十七年七月のことである。その間の富山房の狀況は、何事も記憶に存しない。然し歸朝してからは、國語學國文學、または言語學等の著書の出版について、富山房の世話になつたことが極めて多い。これは私の著書のみではなく、私の知人及び友人の著書についても同様である。さう云ふ關係から、今日まで坂本君には種々世話にもなり、また多少の世話をもして、永き友情を保ち來つたのである。

坂本君は系統のある教育を修めた人ではなく、全く獨立獨行で社會に乗り出し、そして社會で成功した人の一人である。所謂學校出の俊才とは全くその選を殊にしてゐる。然しながら學校出の俊才と相伍して毫も譲らないのみか、或點では寧ろそれ以上に卓越した伎倆を有してゐる人である。何處へおし出して、少しもひげを取らぬ堂々たる紳士であり、勤勉努力、

極めて業務に熱心なる實業家である。勿論前には先覺者小野梓小野義眞兩先生の如き同郷の先輩が同君を指導され、また後には原田二郎翁のやうな偉人が師父の如き溫情を以て、扶掖誘導されたことも忘れてはならない。なほこの五十年來、早稻田大學の高田坪内天野市島諸先生を始め、東西兩帝國大學の諸教授が坂本君の人格に感じ、出版上の助けをなされたのも事實である。かくして一方には諸大學の學者と聯絡を保ち、他方には、かの吉田東伍博士の如き民間の篤學なる學者を優遇して、巨額の資金を惜しまず、著述を成功せしめたことも特記しなくてはならない。また社内をよく統一し、多くの社員をして恰も坂本君の手足の如く働かせ、よく業務を楽しんで勉強せしめ、以て明治大正昭和の三時代を通じて國運の伸長に相伴なひ、出版界の業務を正當なる進路に導き、今日の富山房の隆盛を來さしめるに到つたのである。五十年と云へば長いやうであるが、過ぎれば甚だ短いものである。この間に富山房が日本文化の上になした貢獻は、決して小さいものではない。これは私個人として云ふことではなく、國民としても、國家としても、この事業の成功に對して感謝してもいゝと思ふのである。

然しこれまでの富山房の業務は國內の出版事業に限られて來たが、今日の世運から推して考へて見ると、アジア大陸の文化はもとより、歐米諸國の文化等にも漸次に手を伸ばして行き、これ等をよく綜合して世界的の一大書肆となることを考へねばならぬと思ふ。それには勿

論資本も機關も大擴張をしなければならぬのであるが、然しいづれにせよ世界を本位として
の綜合的一大書肆の實現は、もう目前に迫つてゐると私は考へるのである。かゝる機運を察
して永遠の策を講ずることは、坂本君の夙に考へてゐる所であるかも知れぬが、五十年の歴史
を顧みて、その成功を祝する今日に際し、將來の發展に對する希望を述べることは、決して無益
ではないと思ふ。私は今徹恙のため、語るべき多くのこともあるけれども、一々筆にするの煩
に堪へないので、僅かにその一端を述べて、富山房の今日までの成功を祝し、併せて今後の發展
を切望して熄まないのである。